ひとはく研究員だより

# 天狗像、時代と共に変化

## 「高慢」の象徴

大平和弘主任研究員

「天狗になってはいけません」。近頃、そんな報道ばかり目にします。うぬぼれて人を見下す高慢な様を、なぜ天狗というのでしょう。なぜ天狗の鼻は高いのでしょう。定説はありませんが、天狗の今昔について考えてみたいと思います。

天狗の思想は中国から伝わり、古くは「日本書紀」に雷鳴のする流星のことを天狗と記されています。平安時代には、飛行する悪霊や人に取りつく存在、仏法を妨げる者を天狗とし、「今昔物語集」にて鳥類のトビのような姿で語られ、烏天狗の図像が誕生しました。鎌倉時代に入ると、朝廷や幕府の保護のもと仏教諸大寺の権力が強まり、「天狗草紙」では、慢心し社会を乱す僧侶たちを天狗と非難しました。これが、高慢＝天狗として広く定着した可能性が考えられます。

一方、今日よく知られる鼻高天狗の図像は室町時代に誕生したとされます。鼻高となった背景には、トビを擬人化した際に鼻高の面構えとなることや、平安時代にはすでに「鼻高」は「高慢」を意味する言葉として用いられ、天狗の姿と結び付きやすかったことなどが想像されます。しかし、近世以降の天狗は、源義経に兵法を指南した鞍馬天狗のイメージ、山神や祖霊を祭る火の信仰などとの結び付きが強くなり、次第に神のような存在として認識されていきます。

ここで、明治期の面白い浮世絵（芳年画）の天狗を紹介します。鼻をねじられからかわれる大天狗は「王権を奪い、民にその権力を与えよう」と天狗と化し平安王朝を呪ったとされる崇徳天皇を表します。江戸庶民は、この大天狗を祭る虎ノ門の金刀比羅宮に畏敬の念を抱いていました。一方、左の若者たちは、背景の時計塔から明治に新設された工部大学校の学生と考えられ、技術官僚候補として衣食住全てが官費で賄われる厚遇を受けていたといいます。明治に入り、幕府の御用屋敷のあった虎ノ門を闊歩する学生や官僚たちを、鼻持ちならない出世天狗として風刺的に描いたように思います。

この芳年画から140年以上たつ今日もあまり社会構図は変わらず、むしろ傲岸不遜の出世天狗が権勢をふるい社会を翻弄する様は、天狗の歴史からみると乱世鎌倉の再来といえるかもしれません。民意を尊重する大天狗がしびれを切らし、出世天狗の鼻をひょいとへし折り、羽団扇で一掃する―。そんな芳年画の結末を望まずにはいられません。

トビのような姿で描かれた天狗「北斎漫画 三編」（葛飾北斎画・兵庫県立人と自然の博物館蔵）

金刀比羅宮の大天狗（右）とその鼻をねじってからかう出世天狗たち（左）「東京開化狂画名所 虎の門琴平神社」（月岡芳年画・東京都立中央図書館蔵）

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。